

新著余瀝『シドニーから湘南藤沢へ』

本書『シドニーから湘南藤沢へ』（一九九六年に西田書店より刊行）は、著者が二〇年以上勤務した日本銀行を辞して慶應大学湘南藤沢キャンパス（SFC）の教員として着任し、最近に至るまでの四年間に書いた様々な文章を取りまとめた随想集である。日銀での最後の任務がシドニーの大学における教師稼業であったことから、このタイトルが付いた。

端的にいえば、これは雑文集の見本である。単にエッセーだけではなく、講演記録や挨拶（英語も含む）など多種多様なものが入っている。またその内容も、日銀マンから大学の教員へ、そしてオーストラリアから日本へといった人生の転換期に際しての感慨や、豪州の社会や文化の観察、著者のみたSFCの姿、大学教育のあり方など、多面にわたる。しかし、このような雑文集でも、全体としてみると、いくつかのメッセージを伝えるものになるのではないかと、というのがそもそも本書刊行の動機であった。

それは、ひとつには、話題になることの多いSFCを自分なりに紹介できることだ。SFCに関しては、設立に関与された塾内の方々の苦労話、ないしジャーナリストによって書かれた紹介記事の類は少なくないが、外部からの新参者が観察したその姿（授業・ゼミ・学生と教員の関係など）を個人的体験として記したものはまだ余り見当たらない。このため、世間にSFCへの理解を深めていただくうえでは、こうした感想記も意味があるのではないかと考えたわけである。

そして今ひとつには、現在のようにインターネットの発達によって時と空間を越えた世界（サイバー空間）が展開する時代になっても、人と人とのつながりは依然重要性を失わないという所感を記したかったことである。情報化の進む世界においても、仕事をする地理的場所、組織、そして仕事を共にする人々とのつながり（信頼関係や相互の恩恵）といったことは、やはり万事の基礎になるというのが筆者の経験である。こうしたとらえ方は、はなはだ古めかしいとも言えようが、本書では個人的な履歴の一部を述べることによってこのことを隠されたメッセージとしている。

SFCの同僚方からは、幸い本書の内容に共感するところが多いという感想をいただいたので、SFCあるいはその教員を知っていただく上で本書は何がしかの意義があるろうか。また、全く予想外のことであったが、刊行直後には読後感を何と電子メールによって多くの方々から頂戴したほか、感想を記したお便りも多数受け取った。これらに共通していたのは、楽しく一気に読んでしまった、そして著者の考え方に何か一貫して底流にあるものを感じた、という点であった。本書のエッセーの大半は短編であるが、それらは執筆を求められた当時、厳しい制限字数内で書いたものであったがために、考え方がむしろ凝縮され、より明確になっているのかも知れない。

全くの雑文集ではあるが、これまでに刊行した書物の中で最もビビッドな反応を得た本であり、こうした異例のかたちであっても取り纏めておいてよかったと思っている。

（慶應義塾「三田評論」九八七号、一九九七年一月）